

中世都市ウィンチスタとサウスハンプタン（六）

——第十三世紀初葉以前イングランドの内域都市と沿海都市——

田 中 正 義

一

われわれの考察は、爰にふたたびウィンチスタの中世都市としての其の後の発展に立ち返り、今やかの「ウィンタースドゥウムズデイ」の・既に考察せられたる略一一〇年成立の「第一部」〔本稿第六―八節〕につゞく「第二部」の成立時点たる一一四八年を中心とするところの、此の市の発展段階について、爲されなければならない。

既に前節―第一〇節に於てわれわれの之を知れるがごとく、右のほば一一一〇年より一一四八年に至る間には、そこに、一一三五年に於ける・「第一部」の作成指令者ヘンリ一世の死——ヘンリの妹の子ステイイヴンならびにヘンリの娘マティルダなる、夫々イングランド王位継承権を主張する兩人の孰れか一方に左袒する・高位聖職者を含む諸侯間の以後十八年に及ぶところの内乱の発生、が見られた訣である。

然らば、斯かる一般に当代の政治的変動は、いま、此の市に如何なる歴史的環境を創り出したであらうか。

是より先、ヘンリー一世の猶未だ在世中、一二九九年十月四日、将来「第二部」の作製指令者たるべき・ステイイヴンの弟ヘンリー・オヴ・ブルワ(前出)は、伯父のヘンリー一世に依って、一二六六年に彼の就任したところのグラスタンペリ Glastonbury(Somersetshire)の修道院長職在任のまま、弱冠二十八歳の身ながら、ウィンチスタの司教に指名せられた。而してその後四年、一二三三年には、ステイイヴンの従妹マティルダはその二度目の夫たるアンチャー・伯ジョフロア(前出)とのあいだに将来ヘンリー二世となるべき男子アンリ Henri を儲けたのであった。

かくして今や一二三五年十二月一日ひとたびヘンリー崩殂の報伝わるや、時に大陸ブローニュ Boulogne に在ったステイイヴンは、直ちにロンドンに急行、その都市民の歓迎を受けて王に選立せられ、次いで弟のヘンリー・オヴ・ブルワの住するところのウィンチスタに向った。此の市の指導的な都市民たちは、ウィンチスタ司教を先頭に、彼を市壁外に温かく迎え、彼を擁して市内に入った。彼は、其処で、前王ヘンリー一世の最高判官^{チーフ・ジャスティス}にして王国の司法・財務行政の首長たりし・ソールズベリ司教ロジャア Roger, 古来此の市に存するイングランド王の宝蔵^{トレジャリー}の管理者たる・式部官^{チャイニャー}ウィリアム・オヴ・ポンド・ウーラルシュ(前出)の兩人と面会、畢に彼等を味方に引き入れることに成功して、後者をして彼の伯父の蓄積せる・一説には殆ど拾萬磅にも達したと言われる銀貨、ならびに「大いなる秤量の・評價不能なる金銀の什器」を譲渡せしめた。⁽²²²⁾

然るに、これまでのところ、ステイイヴンは、唯單に彼自身己れをイングランド王たらしめることに成功したと云うに止まり、元来王への加冠なることは之を独り全イングランドの首位聖職者(Brimas)にして教皇使節(Legatus)たるキャンタベリ大司教のみ能くし得たところの此の時代、時の大司教ウィリアム・ド・ウー・コルベイル William de Corbeil

(1133~36)は夙に率先してマティルダに忠誠の誓を立てていたのであった。かくして是よりステイイヴンの支持者とキャンタベリの大司教との間に暫し論議が戦わされた。然し乍ら、ステイイヴンが、現にイングランドに在り、ロンドンの都市民の支持に加えて、王の元最高判官並びに元宝蔵長官、更にはウィンチスタ司教らに受け入れられ、既に此の国の統治機構の中枢部を押え果せているのに對して、一方マティルダの方は、彼女自身或いはその幼児アンリのために王冠を確保すべく目下折角「海峡横断」(transfretio)中にて未だに此の国土に歩を印していない、と云う現実の前には、結局大司教も亦納得せざるを得ず、ヘンリ一世の死より三週間後、一一三五年十二月廿二日、ステイイヴンは、ウェストミンスター寺院に於てキャンタベリ大司教ウイリアム・ドゥー・コルベイルに依りイングランド王として聖別・加冠せられ、夫れはのち時のローマ教皇イノケンティウス二世 Innocentius II (1130~43)の確認するところとなつたのである。その場合、事ここに至るまでには、別けてもステイイヴンの弟ウィンチスタ司教の有せるところの絶大なる影響力、とりわけ教会に對する彼の兄の高潔なる意図——将来教会の自由を恢復し之を維持するであろうとの約束——に關し彼の與えたるところの保證の與つて力があつたことは、疑うべくもない。⁽²²³⁾ステイイヴンが一一三七年初オクスフォードに召集せる司教・諸侯ら直接受封者の大集会(commune concilium)に際し發布したところの、「神の恩寵に依りて、聖職者並びに俗人の同意の下に選ばれ、キャンタベリ大司教にしてローマ教会の使節たるウイリアムに依りて聖別せられ、ローマ管区の司教(＝教皇)たるイノケンティウスに依りて確認せられたる所の、イングリシュの王、朕ステイイヴンは」で始まる、所謂「自由に關するオクスフォード・チャータ」の内容は、主として王弟ウィンチスタ司教の助けに依つていまステイイヴンが教会との間に取り決めたところの協定を具体化したるものに他ならないのである。⁽²²⁴⁾

かくて、右に見たる如くに、その弟の支持なくば或いは王位を確保せんとする彼の一切の努力も畢に実を結ぶことがなかったであろうと思われるステイイヴンとウィンチスタ司教ヘンリー・オヴァーブルワとの間柄であつたのではあるが、斯かる両者の関係には、然し乍ら、その後次第に亀裂を生ずるに到つた。その抑々の発端は、ステイイヴンが、ヘンリーの忠告に耳を藉することなく、飽くまで王権の現状維持に汲々としたところに生じた。ひとたび内乱時代に入るや、教会はひろく横領の恰好なる対象物として自己を曝すこととなり、相闘うステイイヴン・マティルダ両派の殆どすべての者、ステイイヴンの全傭兵(mercenary)——主としてフランドル出身の——中の少数の者ですら、教会の権利を尊重すると云うことがなかった。ステイイヴンは、かくて今や教会関係者の眼には、模範的な‘prince-elect’から最も悪質な‘tyrant’へ、——教会以外の第三者の迫害からステイイヴンのために被害を蒙る者を保護することさえ能くし得ぬところの‘oppressor’へ、と転化するに到つたのである。かくして、教会の統制権は漸次彼の手から滑り落ち、「中部」のウスタ・ヘルフォード Hereford(Herfordshire)、「北部」のカーライル Carlisle(Cumberland)・ダラム(Durham)の各司教管区は、相次いで彼の敵手たるマティルダ派の勢力圏内に没していった。⁽²²⁵⁾

他方、ステイイヴンは俗人諸侯に対する施策の面に於ても数々の過誤を犯した。その代表的な事例は、既述のボウルドウィンドウーレドヴァズ Baldwin de Redvers(本誌第三十六卷第一号、一〇四頁参照)に対する場合である。一二三六年、此の元来ノルマンディ公家の或る庶出の支家の裔たる、デヴンシアの州奉行にしてエクシタの王城の城代たる者がステイイヴンに抗して謀反を企てるや、王は叛徒たちが州奉行の妻子を擁して立籠る所のエクシタ城を包囲すること三ヶ月、城の守兵が城中の井戸の乾上^{ひあ}がりによる極度の渇^{かわ}きから絶体絶命の窮地に陥れる際、飽くまでも談判抜きで無条件降伏に追い込むべしとするウィンチスタ司教の切なる勧告を却け一部諸侯の主張を容れて、見せしめの

ために彼等を処刑することなく、心弱くも守兵を釈放した。当時首魁のボウルドウィン自身は彼の領地たる同州のプリマス Plymouth 東方五マイルなるプリムタン Plymton に在ったが、此の私城もやがて王軍の攻略する所となった。夫れより彼は彼の領地の多数存するワイト島に引上げ、そのキャリスブルク Carisbrooke 城に立籠り、同島を拠点として先述の如くサウスハンブタンまたポーツマスの大陸貿易を食い物にするところの海賊船団を組織することに依つて以後一貫して断乎たるマティルダ派として終始するに到ったのである。⁽²²⁶⁾

その間、一一三六年十一月廿一日に、キャンタベリ大司教ウィリアム・ド・ウー・コルペイルが歿したことは、いま又ステイイヴンとウィンチスタ司教ヘンリー・オヴ・ブルワとの関係の悪化に一層拍車を加えることとなった。

キャンタベリ大司教管区は右のウィリアムの死後二年有余、無主のままに放置せられてその間その収入は自ら王たるステイイヴンの取得する所となっていたが、彼の関する限り、ウィリアムの後継者は疑いもなく、当時イングラント教会切つての実力者たり、剩え教会に對する彼の協定を成立せしめ且つ之が保證人となつた所の、彼の弟でなければならなかつた。而してヘンリ自身已れの大司教に選ばれるべきことを心密かに期待していたのである。然るに、ヘンリの野望は爰に物の見事に外れることとなつた。すなわち、一一三八年のクリスマス・イイヴに、王並びにローマより差遣せられた教皇使節の臨席の下に開かれた所のウェストミンスターの全イングラント教会會議は、一一三四年その前任者の死去以来司教を缺くロンドン司教管区の管理責任者としてヘンリがセント・ポール寺院に赴き助祭叙任式を指揮しつゝあるまさにその瞬間に、王の指名に係る、ベックの修道院長スィオバルド Theobald を次代のキャンタベリ大司教に選んで了つたからである。かくて、ヘンリは、こののち、翌一一三九年五月一日、ヘンリ懷柔についてステイイヴンの意を受けた教皇イノケンティウス二世の異例の措置に依つてイングラント駐在の教皇使節に任ぜられ、形

式上はキャンタベリ大司教をその隷下に置くこととはなったものの、彼の兄に対する憤懣は之を宥むべくもなかった。⁽²²⁷⁾のである。

而して、王ステイヴンとウィンチスタ司教ヘンリー・オーバーブルワとの疎隔に最早決定的な契機となったもの、夫れは、同年六月オクスフォードに生じた一事件であつた。

当時、国内の諸侯は各々競つてその居城を堅固なる要塞と化せしめつつあり、ヘンリーも亦彼のウィンチスタ市の南東隅の司教館ウルウジイ Wolvesey (Wiseia) をして一箇強固なる砦たらしめたが、爾余の司教も皆之に倣う所があつた。⁽²²⁸⁾斯くして、当時、此の国に於て王の許可なくして不法に築造せられた城砦は今や一、二一五の多きに達した。

斯かる形勢に驚愕せるステイヴンは、一一三九年六月廿二日、彼のオクスフォードに召集せる直接受封者の大集会 (curia regis) の席上、突如、当時まで王国の司法・財務行政の最高首長の地位に在った所の前記ソールズベリ司教ロジャア、彼の甥なる司教アリグザンダ Alexandre、彼の息子たる大法官のロジャア、の三人を取り押えて収監し、彼等に対して城砦の明け渡しを強要すると云う挙に出でたのである。⁽²²⁹⁾

かの一一三七年の「自由に関するオクスフォード・チャータ」の規定を瞭らかに蹂躪せる所の、右の王の行動は、澎湃たる城砦建設の動きを鎮静せしめるどころか、却つて益々之を加速化して、今や全イングランドは物情騒然たる事態に立ち到つた。斯かる形勢を看取せるヘンリーは爰に公然兄に敵対する司教の陣営に與して、イングランドにおける教皇使節たる自らの資格に於て、同年八月廿九日ウィンチスタに司教會議を召集、司教たちに対する暴行に関し同會議に申し開きをなすよう王に對し出頭を命じた。その結果一つの妥協が成立して、王の司教授獄の非が宣告せられると共に、他方司教たちのすべての不法なる城砦の明け渡しが決定せられ、王は公的な悔悛を通じて教会の譴責決議に服

することとなった。——此のウィンチスタ會議のち、ステイイウンとウィンチスタ司教ヘンリーオヴァーブルワとの關係がいよいよ冷却の度を増していったことは言を俟たない。

時恰もこの国にはマティルダ到来を待望する声が漸く瀾漫し始めていたが、かのウィンチスタ會議のち一ヶ月、ステイイウンが、マティルダ支持を表明して各地に蜂起せる・前記ボウルドウィン・ドゥーレドヴァズその他の叛乱鎮定に東奔西走しつつあるとき、一一三九年九月三十日、マティルダは、彼女の異母兄たるヘンリー一世の庶子グロスタ伯ロバート Robert とともに、一四〇名の騎士を率いてサシクス州のアランドゥル Arundell に上陸した。ロバートは夫れより彼の本拠なるグロスタシアのプリストル Bristol に向けて直行し、マティルダの直接の招聘者——ヘンリー一世の寡婦アデリーザ Adeliza ならびに彼女の新しい夫ウィリアム・ド・ビーニ William d'Aubigny 両人の保護の下にアランドゥル城に取り残されたマティルダは、やがて駆けつけたステイイウンの軍に取り押えられたが、併しステイイウンは、王の競争者たちは之を一箇所に集めて始末することを得策なれと主張する、ロバートに内通せる所のウィンチスタ司教ヘンリーオヴァーブルワの進言を容れ、同人を附添わせて、マティルダをプリストルなるその異母兄の許に送り届けた。その結果、マティルダ側は茲に却ってプリストル・グロスタを中心し「西部」に其の勢力を集結することを得、今やヘンリー一世の旧臣マイルズ・オヴァーグロスタ Miles of Gloucester を始め此の地方の有力者たちは続々マティルダの陣営に來り投じた。軍を西に進めたステイイウンは、テムズ河谷のウォリングフォード Wallingford (Berkshire) の攻略に失敗、一部包圍兵力を残したるまま更に前進してウィルトシアの西境にまで達したが、その間に彼の軍の側面を迂回せるマイルズの軍、ウォリングフォードを衝いてその囲みを解き、ステイイウン已むなく軍を東の方^{かた}ロンドンに返した。翌一一四〇年も彼は各地の叛乱の鎮定のために六月まで、或いはその地の司教の叛けるイイリ Ely (Cam-

bridgeshire) に、或いはヘンリー一世の庶子レチヌルド(前出)の拠れるコーンワルに、またイイストーアングリアに、と幾ど席暖まる暇がなかった。⁽²³¹⁾ その間、ステイイヴンは、ウィンチスタに開かれた直接受封者の大集会の席上、前年十二月に死去せるかのソールズベリ司教ロジャアの後任問題を提起、夫れに對しウィンチスタ司教たり教皇使節たるころの王弟ヘンリー・オヴ・ブルワは、彼等兩人の甥(妹の子)ヘンリー・オヴ・サリ Henry of Sully を強く推した。然るに、集会は是れに賛成しなかったので、ヘンリーは、憤然席を蹴って立ち去つたと伝えられている。⁽²³²⁾

さて、このときまでグロスタ・プリストルを中心に主として西部諸州に展開せられ來つたステイイヴン・マティルダ兩派の鬭争は、此の年——一四〇年十二月以降、グロスタ伯ロバートの女婿チェスタ伯ラヌルフ Ranulf, ラヌルフの異父兄でボウルドウィン・ド・ウーレドヴァズの姉妹を妻に有つ・のちのリンカン伯ウィリアム・ド・ウィルメア William de Roumare, の兩人が茲に彼等の従来の中立的立場を一擲してマティルダ側に與するにおよんで、今や一挙に中部諸州 Midlands の心臓部にまで拡大せられることとなった。その場合、前者は、当時チェシアの一州全体を 'pallinate' として支配するに止まらず、その家族關係を通じて実に二十二州に亘つて所領を有し、後者またリンカン州に広大なる土地を有したのである。彼等は、宛も王の忠実なる支持者であるかに見せ掛けつつ、此の年も押詰つて突如リンカンの王城を占拠した。ステイイヴンはひとたびは彼等兩人の行爲を是認したるかに見せて、年が改まると直ちにリンカン城を攻め立てた。ラヌルフは唯一人城を脱出、岳父ロバートとともに大軍を集めて再びリンカンに引返した。一一四一年二月二日、ステイイヴンは、城外のリンカン市の西郊に於て之に對戦、彼に味方せるバロンたちの遁走したるのちも、飽くまで踏み止まって奮戦したが、その麾下の傭兵の騎兵隊は然し、マティルダ側に與せるためその封地を喪失せる所の・ロバート麾下の騎士軍の死に物狂いの突撃の前には之に抗し切れず、終にステイイヴンは

グロスタ伯の軍門に降つて、捕虜としてグロスタなるマティルダの許に送られ、四日後プリストルなる同伯の居城に監禁さる身となつた。⁽²³³⁾

かくて、今や、ウィンチスタ司教ヘンリーオウーブルワこそが、教皇使節として、まさに全状況打開の鍵を一手に握ることとなる。けだし、いま若しステイヴンにして王位より退けられ、代つてマティルダにして王位に登るとすれば、そのことは、教会の審判に依り、教会の支持の下に、為されねばならないからである。

一一四一年二月九日、グロスタに在つてリンカンにおける勝利の報告を、此の地に捕虜の王を伴い來つたグロスタ伯ロバートより受けたマティルダは、直ちにロバートと共に其処に王冠と王の宝藏との存するウィンチスタに向け、ヘンリーオウーブルワの支持を贏ち得べく出發した。併し、彼女はウィンチスタに入るに先立ち、三月二日、同市の手前のウェアウエル(本誌第三十四卷第三号、八頁註(5)参照)で教皇使節と会見して彼との間に一つの取り決めを為さねばならなかつた。即ち、彼女は、「イングランドにおける「教会に關する」主要な事柄、とりわけ司教職・修道院長職の授與は、彼(教皇使節)が今若し彼女(マティルダ)を公式にレイディとして聖なる教会に受け入れ、彼女に対して常に渝らぬ忠節を尽すならば、彼(教皇使節)の権限に属せしめらるべきこと」を誓わねばならなかつたのである。而して、斯くの如き了解の下に、マティルダは、翌三月三日、正式にウィンチスタ司教座聖堂に入ることを許され、四月八日には此の地の教皇使節主宰の教会會議に於て公式にイングランドの支配者に選立せられた。但し、その場合、一切を取り仕切る教皇使節の動議に基いて、彼女は、戴冠式までの期間、イングランド女王ではなく、*Domina Anglorum*——「イングランドのLady」に、暫定的に選ばれたのである。⁽²³⁴⁾

然しながら、慣例に従つてウェストミンスターで執り行わるべき戴冠の儀式を、マティルダは結局経験せず仕舞いに

終ることとはなつた。夫れと云うのも、この頃ようやくウィンチスタを凌いで富裕な「都市の自由を守る誓約共同体 (Schwurgemeinde)」——「commune」——として抬頭しつつあり、先には一三五年ステイヴンを王に選立したところのロンドン、の都市民が、教皇使節の呼び掛けに応じてウィンチスタ會議に送り來つた所の其の代表を通じてステイヴンの釈放を要求し、而もその後彼等が不承不承ながらも受け入れることに決したマティルダが「洗礼者ヨハネの祝日」(六月廿四日)の数日前戴冠のためロンドン入りを果すや、又々愚かにもロンドン都市民に対し宛も打ち負かしたる敵に対するが如く高圧的な態度を以て臨み、彼等に頻に金錢の贖出を強要して止まず、ために都市民の蜂起を誘起して、結局短期間の滞在ののち彼女はロンドンより退去するの已むなきに立ち到らしめられたからである。⁽²³⁵⁾

ロンドンを放逐せられたマティルダは、一旦オクスフォードを彼女の本営としたが、このとき既に彼女はグロスタ伯をのぞく従来の支持者の殆ど悉くを失つていた。偉大なオボチュニストにして策略家たる教皇使節ヘンリー・オヴ・ブルワは、マティルダの教会に対する反動的な態度に腹を立て、今やロンドンの都市民に依つて迎え入れられたステイヴンの後のマティルダ Matilda に接近し、彼女とギルフォード Guildford (Surrey) に於て会見せる結果一定の合意に到達して、ウィンチスタに帰還したが、一方のマティルダは彼女の命に服さぬ教皇使節を処分すべく一四一年七月三十一日オクスフォードよりウィンチスタに軍を進め、前記ウルヴジの司教館を包囲、ヘンリー脱出して后マティルダマティルダに援助を求めた。ヘンリーは、ウィンチスタ脱出に際し報復のために火を放つたので(八月二日)、茲に「征服王」創建の王宮を含めて市内の大部分が、市壁の北門外のかのハイド修道院と共に、灰燼に帰することとなつた。マティルダの反対陣営は着々として兵力を増強、包囲軍は今や逆包囲の窮地に立たされるに到り、九月十四日遂に総退却を決議した。夫れは、滲漶たる「ウィンチスタの潰走」(Winthensis dispersio)に帰結したのである。マティルダは、命から

がグロスタに逃げ帰ったが、殿^{しんがり}を勤めた彼女の異母兄グロスタ伯ロバートは、ウィンチスタ西方のスタクブリチ Stockbridge(Hampshire)においてテスト河渡河中に追跡軍の手に捕えられ、のち十一月一日ステイイヴン釈放を交換条件として、辛うじて放免せられた。而して、ウィンチスタが、后マティルダの解放軍に依つて占領せられてのち、徹底的に略奪せられたことは、言う迄もない。此の時此の市は、まさに半ば壊滅状態を現出したのであって、このことは、厳然たる事実として爰に銘記せられねばならぬ。

ウィンチスタ司教ヘンリーオヴブルワは、その兄ステイイヴンの釈放後、一一四一年十二月七日、ウェストミンスターにおける教皇使節主宰の教会会議に於て、再び兄を正式にイングランド王として認め、ステイイヴンは同年のクリスマスにキャンタベリ大司教スィオバルド(前出)の手から再度王冠を授けられた。⁽²³⁶⁾

内乱は、このちも依然激しく続いた。然し、一一四七年にはその勢は衰え始めた。⁽²³⁷⁾

一一五三年八月十七日ステイイヴンの継嗣ブローニユエースタッシュ Eustache, Duc de Boulogne の突然の死ののち、ステイイヴンと、かのマティルダとジョフロアとのあいだに生れたアンリ——一一五〇年以来父の跡を承けてノルマンディ公——との両者は、キャンタベリ大司教スィオバルド並びにヘンリーオヴブルワ——一一四三年以後は教皇使節の地位を去って単にウィンチスタ司教——両者の教導の下に、漸く和解への努力を続け、その結果は、同年十一月六日、イングランド王ステイイヴンとノルマンディ公アンリとはウィンチスタにおいて会見、ステイイヴン亡きあとは王国はアンリのものたるべきことを両者堅く誓約することとなるのであるが、然し此の時を俟たずして、内乱はもはや一一四九年までに事実上終結を見るに到っていた。ステイイヴンは既にマティルダの夫アンチュウ伯ジョフロアのためにノルマンディを奪われており、イングランドに於てもその「西部」・「北部」を十分に掌握しておらず、爾余

の地方に於ても大いなる權威を有しなかつたけれども、而もなお彼の運命は漸く好転して、彼の敵対者たちは徐ろに彼の死を待つことに甘んずるようになったのである。⁽²³⁹⁾

大略、以上の如きが、抑々ウィンチスタ司教ヘンリー・オヴ・ブルワの命に依り編纂せられたところの「ウィンタン・ドゥウムズデイ」第二部のいま成立した、一四八八年當時に於ける、ウィンチスタを圍繞するところの一般にイングランドの政治史的状況であり、且つはその動向であつた。

- (238) *Gesta Stephani*, ed. by K. P. Potter with new introduction by R. H. C. Davis (Oxford, 1976), pp. 4-9; G. W. Kitchin, *Winchester* (London, 1890; 5th edn., 1897), pp. 85 ff.; R. H. C. Davis, *King Stephen, 1135-1154* (Berkeley, 1967; Longman Paperback edition, corrected & amended, with a new postscript, New York, 1977), pp. 5, 13, 17 f.; H. A. Cronne, *The Reign of Stephen, 1135-54; Anarchy in England* (London, 1970), pp. 29 f., 202 f.; John T. Appleby, *The Troubled Reign of King Stephen* (London, 1969), pp. 21 ff. など。ロニヤトなる人物に關しては、H. G. Richardson & G. O. Sayles, *The Governance of Mediaeval England from the Conquest to Magna Carta* (Edinburgh, 1963), pp. 158-65; Francis West, *The Justiciarship in England, 1066-1232* (Cambridge, 1966), pp. 16-21; Appleby, *op. cit.*, pp. 39, 64; Frank Barlow, *The English Church, 1066-1154* (London, 1979), pp. 79 f., 91 などを参照せられた。

- (239) Appleby, *op. cit.*, pp. 23 f.; Davis, *op. cit.*, pp. 18 f., 29; Cronne, *op. cit.*, p. 30; Barlow, *op. cit.*, p. 91. など。ウィリアム・コルヴェイルの大司教就任まじの経歴」とりわけ一三二八年四月廿九日ヘンリー一世が娘マティルダの自己の後継者たることを高位聖職者を含む諸侯に認めしめんとして召集せる会所に於て、彼のキャンタベリー大司教として執れる態度に就いては、Barlow, *op. cit.*, p. 85 を参照せられた。

- (240) William Stubbs, ed., *Select Charters and Other Illustrations of English Constitutional History from the Earliest Times to the Reign of Edward the First* (Oxford, 1870; Ninth edn., revised throughout by H. W. C. Davis, 1913; Reprinted with corrections, 1921), pp. 143-4; *English Historical Documents*, Vol. II, ed. by David C. Douglas &

George W. Greenaway (London, 1953; 2nd edn., 1981), pp. 435-6; Davis, *op. cit.*, pp. 18 f.; Cronne, *op. cit.*, pp. 32 f.; Appleby, *op. cit.*, pp. 32 ff.; Barlow, *op. cit.*, pp. 91, 130, 304.

(52) Barlow, *ibid.*, p. 92.

(53) *Gesta Stephani*, pp. 30-45; Frank Stenton, *The First Century of English Feudalism, 1066-1166, being The Ford Lectures, 1929* (Oxford, 1932; 2nd edn., 1961), p. 239; Davis, *op. cit.*, pp. 24 ff.; Cronne, *op. cit.*, pp. 33, 147; Appleby, *op. cit.*, pp. 35-9; 本書第三章終「中」一〇國風參照。

(54) Davis, *op. cit.*, pp. 29 f., 34; Cronne, *op. cit.*, p. 37; Appleby, *op. cit.*, pp. 60 f., 64-69; Barlow, *op. cit.*, pp. 93 f. なかへくノリが王に強ひて諸々やふはた事情に據つてサ'ントロト' なるがトア'ルニユ'を語ふなり云々。

(55) Kitchen, *op. cit.*, pp. 87. Cf. Davis, *op. cit.*, p. 122.

(56) Cronne, *op. cit.*, pp. 37 f.; Appleby, *op. cit.*, pp. 65-8. Cf. Davis, *op. cit.*, p. 31.

(57) Kitchen, *op. cit.*, pp. 87 f.; Davis, *op. cit.*, pp. 34 f.; Cronne, *op. cit.*, pp. 38 f.; Appleby, *op. cit.*, pp. 70-73.

(58) *Gesta Stephani*, pp. 84-97; Davis, *op. cit.*, pp. 39-43; Cronne, *op. cit.*, pp. 39 f.; Appleby, *op. cit.*, pp. 74-80. Cf. J. H. Round, *Geoffrey de Mandeville, A Study of the Anarchy* (London, 1892), pp. 284 f., 322; Stenton, *op. cit.*, pp. 236 ff.

(59) Appleby, *op. cit.*, p. 83. Cf. F. Maurice Powicke & E. B. Fryde, eds, *Handbook of British Chronology* (London, 1939; 2nd edn., 1961), p. 251.

(60) A. L. Poole, *From Domesday Book to Magna Carta* (Oxford, 1951), pp. 140-2; Davis, *op. cit.*, pp. 49-54; Cronne, *op. cit.*, pp. 42 f.; Appleby, *op. cit.*, pp. 85-90, 91-6.

(61) *Gesta Stephani*, pp. 118 f.; Davis, *op. cit.*, pp. 56 f.; Cronne, *op. cit.*, pp. 43 f.; Poole, *op. cit.*, pp. 142 f.; Kitchen, *op. cit.*, pp. 89 f.; Appleby, *op. cit.*, pp. 97-102; Barlow, *op. cit.*, pp. 96, 306 f.

(62) *Gesta Stephani*, pp. 120-7; Poole, *op. cit.*, pp. 143 f.; Kitchen, *op. cit.*, pp. 89 f.; Davis, *op. cit.*, pp. 58 f., 61 f.; Cronne, *op. cit.*, pp. 45-8; Appleby, *op. cit.*, pp. 102 f., 106, 109 ff.

(63) *Gesta Stephani*, pp. 126-37; Poole, *op. cit.*, pp. 144 f.; Davis, *op. cit.*, pp. 64 f.; Cronne, *op. cit.*, pp. 48-50; Kitchen,

- in, *op. cit.*, pp. 90-2.
 (237) Burlow, *op. cit.*, p. 97.
 (238) Davis, *op. cit.*, pp. 121 ff.; Appleby, *op. cit.*, pp. 191, 194.
 (239) Burlow, *op. cit.*, p. 97.

一一一

われわれがいま「ウィンタンドゥウムズデイ」の「第二部」を採り上げて直ちに気付くことは、夫れが「第一部」とは異なつて、ウィンチスタの市域全体にわたる調査である、と云うことである。即ち、既にわれわれの之を知れるごとく、「第一部」に於ける調査の対象は、一部王の直接受封者たるバロンの土地(*terra baronum*)である場合を除き、主として此の市に於ける王領地(*terra regis*)であつた。然るに、此の「第二部」は、その前文の示しているように、(一)誰が「当該土地を」保有しているか(*quisquis tenet*)、(二)彼は幾何「の面積の土地」を保有しているか(*quantum tenet*)、(三)彼は夫れを誰から保有しているか(*de quocunque tenet*)、(四)各人は当該土地から夫々幾何「の利得」を収めているか(*quantum quisque inde capit*)の四点を、ウィンチスタの土地について(*de terris Winton*)「一般的・總体的に問題にしているのである。

斯かることを抑々此の調査の指令者たるウィンチスタ司教ヘンリーオヴァーブルワが問題としなければならなかつた所以のものは、自ら明らかであろう。今や此の市は、内乱に依つて大いなる破壊を蒙つたのである。一一四一年には此の市の内に於て、又その周辺に於て、激しい戦闘が行われたのである。

かくて、そこには、その全部或いはその一部が、荒廢状態に陥ったところの土地が生じたのであった。

斯かる「荒蕪地」についての記載は、此の「第二部」に於て、ハイーストリイトで一箇所⁽²⁴¹⁾、ハイーストリイト北側の通りのうち、*Scortlenestret* (「第一部」の *Scortlenestret*) で五箇所⁽²⁴²⁾、*Aluarnestret* (「第一部」の *Aluarnestret*) で三箇所⁽²⁴³⁾、*Flesmangrestret* で六箇所⁽²⁴⁴⁾、「第一部」には現われなかった所の・依然ハイーストリイト北側の通りの一つである *Silduortlenestret* 一箇所⁽²⁴⁵⁾、*Wunegrestret* (「第一部」の *Wunegrestret*) で一箇所⁽²⁴⁶⁾、*Tannerestret* 五箇所⁽²⁴⁷⁾、*Buchestret* で六箇所⁽²⁴⁸⁾、翻ってハイーストリイト南側の通りのうち、「第一部」には現われなかった・「東門」に間近な *Colobrochestret* 一箇所⁽²⁴⁹⁾、*Calbestret* 一箇所⁽²⁵⁰⁾、*Golestret* 一箇所⁽²⁵¹⁾、*Geresetret* 二箇所⁽²⁵²⁾、尚そのほかに、「第一部」に該当する項目の缺如している・「南門」外で二箇所⁽²⁵³⁾、の以上計三十四箇所に見出されるのである。而してこれらの記載條項の一つ一つをいま仔細に検討吟味するとき、われわれは、そこで *»astus* と形容せられた土地 (*terra*) が必ずしも常に一つとは限らないことに、気付くのである。——^[434]は、此の通りにロジャアの息子のウィリアムなる者が、元来王領荘園たるベイジングストウクなる・王の封地 (*»endum regis*) の一部をなすところの、三つの荒蕪地を (*»i terras vastas*) [保]有していることを示しており、^[474]は、前記ベイジングストウクの東北方にあたるベイジング *Basing* (*Basinges*) の領主として夙に「ドゥウムズデーブク」に現われるところのヒュードゥールポール *Hugh de Port* の息子ヘンリ——彼はハンブシア州の州奉行としてかのウィリアム・オウーポンドゥールラルシュ(前出)の前任者であった——の、息子のチョンに当ると思われる人物が、此の通りに荒蕪地である二つの土地を「保」有していることを示している。而も後者について興味深いことは、此の^[474]の記載内容と次の同じ此の通りの^[475]の記載内容との関連である。すなわち、^[475]には、オスベルト・ワスパイルなる者が、此の調査の行われた前年——一一四七年に死歿せるところの、

かのグロスタ伯ロバート(前出)の封地の一部をなす「いま、一つの土地を同じ場所」——[474]の保有地の在ると同じ場所)に「[Ibidem i. aliam terram]「保」有しているが、夫れは荒蕪地である、と記されていて、元来、[474]の二つの土地と[475]の土地と以上三つの土地が三つながらすべてかのマティルダ派の領袖であった・マティルダの異母兄の封地に他ならぬことを、そしてそれらが彼の死後すべて荒蕪地の状態に在ったことを、われわれは知り得るのである。又、[521]は、此の通りにかのウェアウエル(前節一八九頁参照)の尼僧院長の封地の一部をなすところの二つの空地(ii. vacue terre)の存することを示しているが、此の場合いま『vacuus』とは其処に家屋が建っていない状態を表わして居るのである。又、[645]は、此の市の遙か東南方サウスウィック Southwick (Hampshire)の修道院に所属する、その南のポートチェスタ Portchester (Hampshire)に在るキャノン団体が、元来ウィンチスタにおける王の封地の一部であるところの、二つの荒蕪地を(ii. terras vastas)此の通りに保有していることを示して居り、[680]は、此の通りに於て王の書記(scriba)のギスルフなる者が王に一七ペンス「の地代」を「支払って曾て保有していた」二つの土地が今や荒蕪地になって了って居ることを示しているが、その場合後者のギスルフは、既に「第一部」に於てヘンリ一世の治世に、懺悔王時代の「probable」な造幣人Liwin, おなじく「possible」な造幣人Lefstanという、二人の王領地のテナントの後継者として、此の通りに二つの屋敷地(ii. mansuris)を保有していたことが知られているから、「第一部」の成立したはば一一一〇年の頃より凡そ三十八年の歳月が経過した現在、夫れら二つの屋敷地が今や二つの荒蕪地に化して了っていることを、知ることが出来るのである。なお、[1030]もまた、「南門」外に荒蕪地と化せる四つの宅地(quatuor curtilia)の存在したことを示している。

もとより、斯かる荒蕪地の実数——四、三、といふ数値は、一一四八年現在「第二部」の調査対象となつたところのウィ

ンチスタにおける土地財産の全体からすれば、決して是れを以て大きいとなし得ないことは言う迄もない。然しながら、いま一一〇年の頃成立の「第一部」が、そのうちに、すべて「西門」外に所在するところの三つの荒蕪地——一つは前記ウィリアム・オヴ・ボン・ドゥーラルシュが王領地の保有者デフントラヌルフーパストレルなる者よりいま再保有する夫れ、⁽²⁵⁸⁾一つは、既にひとたび引用せられたる、「第一部」の調査に直接従事せるウィンチスタの代表的都市民たちの調査前の宣誓に際し前記ウィリアムと同様その立会人の一人となった式部官シェンバウハアバートの門前に曾て懺悔王時代に存せる夫れ、⁽²⁵⁹⁾一つは、懺悔王時代にカベルなる者が保有しヘンリ一世時代当時そこに三戸の家屋が存するところの宅地に曾て懺悔王時代に隣接して存せる夫れ——⁽²⁶⁰⁾を記録して居るに過ぎないとき、われわれは、如何にしても其の相対的な意義を重視せざるを得ないのである。而も「第一部」に記載せられたる以上三例の荒蕪地のうち、第一例を除いて、他は孰れも——第二例は懺悔王時代ののち其処に五戸の家屋が、第三例は懺悔王時代ののちブルマンなる者に依つて其処に一戸の家屋が夫々建てられるに到つて居り、「第一部」成立の一一〇年頃の時点に於て此の市に現に存せる荒蕪地は厳密には僅かに一個を数えるのみなるに於ておや。

とは言え、われわれは、また、「第二部」における内乱の傷痕を過大評価することは、この際、慎まなければならない。そのことは、われわれが右の如き荒蕪地の一一四八年現在の分布に着目するとき、瞭らかである。すなわち、斯かる荒蕪地の殆どすべてはいま市壁内に存するのであるが、その大多数は、市壁内に於ても比較的家屋の密集していないところの地域、わけてもハイーストリイト北側の幾つかの通りに多く見出されて、戦闘が恐らく最も激烈を極めたであろう、二つの城郭ないし王宮の附近に荒蕪地がいま集中している、と云つた如き事態は毫も認められないのである。蓋し、たとえ広範囲に亘る市域が一一四一年の此の市の攻防戦のさなかに荒廢に歸したとしても、夫れらの地

域の大部分にはその後調査時点たる一一四八年に至る迄の七年間に次々に家屋が再建されていったことであろう。而して、市壁外では、われわれの既に知る如く、かのハイド修道院は右の攻防戦の期間中に同様烏有に歸したのであったが、一一四八年現在、われわれは、今や嚴として存在する同修道院の位置するところの、「北門」外の地域に於て其処に如何なる荒蕪地をも之を発見することを得ないのである。

ともあれ、既に前節の結語に於てわれわれの之を明らかにしたる如く、今や内乱が事實上、その終結を見て、聖俗のバロンたちが一斉に己がじし所領の再整序に着手した段階に於て、中世一般に世俗の封建的大土地所有のトレীগーよりもその所領の経営に熱心であつたところの聖界⁽²⁶¹⁾における夫れら——高位聖職者のいま一人として、殊の外その所領経営に熱意を示したとされる、ヘンリー・オヴ・ブルワが、後述するごとく此の市切つての大領主として、斯かる「第二部」の如き調査を指令したと云うことは、敢て異とするに足りないのであるが、当時彼が彼の兄たる王の下に、此の市に於て「quasi-royal position」を享受しつつ特別の任務を帯びていた、と云う事情も此の際十分考えられて然るべきであらう。⁽²⁶²⁾

いま、一一四八年現在、此の市に於ける代表的な封建的大土地所有者たち——王、司教、ウィンチスタの mother church たるオウルド・ミンスタのセント・スウィズイン修道院 St Swithin's Priory の院長、ハイド修道院の院長、セント・メアリ修道院 St Mary's Abbey (Nunaminster)、ウェアウエル修道院・ロムジイ修道院 Romsey Abbey の夫々の院長^{アベス}、なる七人を中心に、当代のウィンチスタの領主層に就いて、彼等の封地 (feudum) を構成する、「第一部」に於て domus, mansura の形で現われた所の此の「第二部」に於ける terra——假に「屋敷地」を以て表わす——の数を手がかりとして、各々の土地所有の規模を問題とするとすれば、われわれは、『ウィンチスタ研究』第一巻第四章の共同

執筆者ビドゥル・キーン両氏に依つて、左の如き統計的數値を與えられるのである。⁽²⁶³⁾

封地所有者	屋敷地數
王	二五九
司教	三六四
聖スウィズイン修道院長	一八五
ハイド修道院長	九四
聖メアリ尼僧院長	二六
ウエアウエル尼僧院長	一九
ロムジイニ僧院長	* 一三
その他の私的領主・地主	一二〇

すなわち、全屋敷地一〇八〇の三四パーセントは、司教之を所有し、次いで王は二四パーセント、スントースウィズイン修道院長は一七パーセント、ハイド修道院長は九パーセント、スントーメアリ尼僧院長は二パーセント、ウエアウエル尼僧院長も同様二パーセント、ロムジイニ僧院長は一パーセント、そうして残り一一パーセントを以上七名以外の者が分割して居ることになるのである。

では、此の關係を、いま、それぞれの封地所有者は、彼等の所有に係る屋敷地を保有するところの者より、一般に「土地所有の經濟的自己實現形態」たるところの——此の時代「剰余価値の唯一の正常且つ支配的な形態」たりしところの地代として、凡そいくばくのもの、を収取していたか？ と云う關係に置き換えてみれば、如何。これまた前記ビドゥル・キーン両氏の計算に基いて、われわれは次の如き結果に到達するのである。⁽²⁶⁴⁾

封地所有者	地代総額		
	ポンド	シリング	ペンス
王	七	三	四 $\frac{3}{4}$
司教	六 $\frac{9}{10}$	七	六 $\frac{3}{4}$
聖スウィズイン修道院長	二 $\frac{8}{10}$	三	八
ハイド修道院長	一 $\frac{1}{10}$	四	三 $\frac{1}{2}$
聖メアリ尼僧院長	六	一	九 $\frac{1}{2}$
ウエアウエル尼僧院長	二	二	二
ロムジイ尼僧院長	一	〇	〇
その他の私的領主・地主	二 $\frac{9}{10}$	一 $\frac{7}{10}$	九

すなわち、全地代額四二三ポンド七・五ペンスの二六パーセントは、いま司教に帰属し、次いでその七パーセントはセント・スウィズイン修道院長に、三パーセントはハイド修道院長に、二パーセントは王に、一パーセントはスト・メアリ尼僧院長に、〇・五パーセント未満は、それぞれウエアウエル尼僧院長並びにロムジイ尼僧院長に、そうして残り七〇パーセントを以上七名以外の者が分配して居ることになるのである。

却説、此処で注目すべきは、此の「第二部」に記録せられている八百ないし九百名の私的領主・地主層が全体として收取して居るところの地代の総額が此の市に於ける代表的な封地所有者七名の夫々收取する所の地代総額の合計一二

五ボンドニシリング一〇・五ペンスを庄倒的に上廻っている、と云う事実である。而も、私的領主²⁶⁶地主は、之を個別的にみるならば、彼等は、一一四八年現在、彼等が第三者に保有せしめている其の所有に係わる屋敷地の数に於ても、又彼等の夫れらを通じて取得するところの地代の総額に於ても、前記七名の大封地所有者に比し、概して低く位置づけられるのである。そのことは、ビドウル・キーン両氏の作成になる、一一四八年現在此の市に於て二つ以上の屋敷地を所有する私的領主²⁶⁶地主一九〇名に関する、左掲の表の之を明示する所である。

〔一〕

屋敷地数		私的領主 ²⁶⁶ 地主数	
一	四	一	一
二	三	二	一
一〇	一	二	一
九	〇	二	一
八		四	二
七		二	五
六		一	一
五		一	九
四		三	五
三		五	〇
二			

〔二〕

地代収支上の黒字	私的領主・地主数
八ポンド一シリング	一
七ポンド乃至八ポンド	一
六ポンド乃至七ポンド	〇
五ポンド乃至六ポンド	二
四ポンド乃至五ポンド	一
三ポンド乃至四ポンド	二
二ポンド一〇シリング乃至三ポンド	〇
二ポンド乃至二ポンド一〇シリング	三
一ポンド一〇シリング乃至二ポンド	七
一ポンド乃至一ポンド一〇シリング	一八
一〇シリング乃至一ポンド	三〇
一〇シリング未満	七四
地代収支上の赤字	私的領主・地主数
一〇シリング未満	四三
一〇シリング乃至一ポンド	五
一ポンド以上	三

すなわち、一一四八年現在ここウインチスタ市に二つ以上の屋敷地を所有する所の一九〇名の私的領主・地主のうち、その半数以上の者が二つの屋敷地の所有者であり、その半数に満たぬ僅かに七二名の者のみが、七名の大領主中

断然貧しきロムジイ尼僧院長の地代収支上の黒字よりもいまだなる地代収支上の黒字を上げ得ているに止まり、夫れは全私的領主。地主の総地代収支上の黒字の恐らく八パーセントを下廻るものと推定されて居るのである。⁽²⁶⁷⁾

その場合、われわれの注目すべきは、七つから一四の屋敷地を所有するところの、計一五名の私的領主。地主の存在である。彼等は、一つの輪郭のはっきりしたグループを形づくっているかに見える。そのことは、いま一つ以上の屋敷地を所有する私的領主。地主の地代収支に分析を加えることに依つても、裏付けられるのである。すなわち、一九〇名の三分二を僅かに上廻る一四七名の者は、その地代収支上の黒字が一ポンドに満たないか、或いはその地代収支上の赤字が一〇シリングに満たないか、その孰れかであるが、一方そこには又地代収支上の黒字が二ポンド以上に及ぶ者が一〇名存し、彼等こそはいま、此の市に於ける私的領主。地主中最も富裕なる階層を代表する者である、と判断せられるのである。

ところで、斯かる階層に属する者として、茲に宛も聖書にでも出てきそうな・サムソン Samson なる名の人物が見出されると云うことは、われわれにとって極めて興味深い事実であると言わねばならない。

われわれは、曩に「第一部」の分析に際して、凡そ手工業。商工業活動と密接不可分の關係に在る通貨の圧造に従事する所の王の「造幣人」(monetarius)が、ヘンリー一世時代一一一〇年、此の市に於て、'probable'な、また 'possible'な夫れをも含めてそこに八名ないし一名存し、比較的多数の屋敷地を王より保有、所有して、当時此の市の人口中⁽²⁶⁸⁾相対的に富裕なる階層を形成していた事実を聊か明らかならしめる所があったのであるが、今やステイイヴン王時代「第二部」におけるハイーストリイトに関する記載中に、われわれは、次の如き諸條項を読むのである。

「造幣人サムソンは、王に「ランドゲイブルとして」六ペンスを、「スントースウィズイン修道院の」プライアに「地

代として」二〇シリリング(一ポンド)を「納む」。而して「彼自身は」一四シリリングの地代収入を上げ。」「〔64〕Sanson monetarius regi vi d. et priori xx s. Et habet xliii s.)

「更にサムソンは王に「ランドゲイブルとして」六ペンスを、「ウィンチスタの」司教にそのバロン「の土地」につきて「地代として」二〇シリリング(一ポンド)を「納む」、而して「彼自身は」四四シリリング(二ポンド四シリリング)の地代収入を上げ。」「〔65〕Item Sanson regi vi d. et episcopo xx s. de B. et habet xliiii s.)⁽²⁶⁹⁾

「造幣人サムソンは「ウィンチスタの」司教にそのバロン「の土地」につきて「地代として」三シリリング「を納む」。

〔118〕Sanson monetarius episcop iii sol. de B.)

「都市民(*Burgensis*)のシフフリ Geoffrey は、式部官アルウィン Alwin (——恐らくは后マティルダ(前出)の式部官アルドウィン Aldwin と同一人物)のもと土地たりし一つの土地を(i terram)を保有するも、「夫れは地代の納付を」免れてあり、而して「彼は」サムソンに対し四九シリリング(二ポンド九シリリング)と四ペンスの地代を納む、而して「彼自身は」一〇〇シリリングと一〇シリリング(一五ポンド一〇シリリング)と八ペンスの地代収入を上げ。」「〔128〕Gautfridus burgensis tenet i terram que fuit Alwini camerarii quietem et reddit Sanson xlix s. et iiii d. et habet c s. et x s. et viii d.)

「而して同じサムソンは、「ウィンチスタの」司教にそのバロン「の土地」につきて四シリリングの地代を納む、而して「彼自身は」二〇シリリング(一ポンド)の地代収入を上げ。」「〔129〕Et idem Sanson reddit episcopo iiii s. de B. et habet xx s.)

これらの記載條項を通覧するとき、造幣人サムソンは、以上五箇所の屋敷地から合計六ポンド七シリリング四ペンス

の地代収入を上げ、一方合計二ポンドハシリングの地代を第三者に支払っている勘定になる。従って、彼の手許には差引き三ポンド一九シリング四ペンスと云うものがいま蓄積せられる、と云うことになるのである。

なお、このサムソンに関して附言すれば、現在古銭学(Numismatik)の提供するところの證據——出土銀貨の裏面(reverse)の銘文(Legend)の示すウィンチスタの造幣人のサイン、の中には、現在までのところ彼の名は見出されて居ない。然しながら、ANTOI, ANT あるいは AN という造幣所(mint)のサイン入りの、ステイイヴンの最初の発行に係る 'irregular coins' (G. C. Brooke, *A Catalogue of English Coins in the British Museum: The Norman Kings*, pp. xciv-xciv, 381 f.—cited in Biddle, ed., *op. cit.*, p. 415, note 5) の庄造者はまさしくサムソンとなつて居るのであり、今日此の銀貨の庄造地としてはキャンタベリ説の存在を無視し得ないけれども、かの一一四一年の《*Wintoniensis dispensio*》(前節一九〇頁)のち、此の市の主としてハイーストリイト南側の、破壊された王宮の東に隣接して各自その仕事場(*moneta*)を開いていた・サムソンを含む造幣人たちから成る「ウィンチスタ造幣所」が一時、短期間そこに移転していたところの、サウスハンプタンこそが此の銀貨の庄造地である、と考えられる、と、『ウィンチスタ研究』第一巻第四章の共同執筆者たちは指摘している。⁽²⁷⁰⁾ ヌミスマーティクについては全くの素人である筆者には、もちろん其の当否を判断する力は無いのであるが、いま若し彼等の右の推定にして誤りなしとせんか、われわれは、将来、ウィンチスタ、特にその造幣所とサウスハンプタンとの関係について、新たな展望の其処にひらけ来たるべきことを、期待し得るのである。

(未完)

(240) 本誌第三十五卷第二号、一八八九頁参照。

中世都市ウィンチスタとサウスハンプタン(六)

- (161) Cf. Biddle, ed., *op. cit.*, pp. 18 (note 3): 492 f. 彼は「ドゥウムズデーブク」が作製せられた理由として、夫れは「ひと各々その固有の諸權利に満足して、他人の夫れら(諸權利)を罰せらるることなく侵害するが如きこと無からしめんが為」と(ut uidelicet quilibet iure suo contentus alienum non usurpet impune) 作製せられた、と語ったと伝えられる。
- Cf. *Dialogus de Scaccario*, ed. by Charles Johnson (London, 1950), p. 63. なお、本書に就いては、本誌第三十五卷第二号、一九七頁註(11)「ならびに前掲拙著『イングランド初期経済史の諸問題』、二八二—三頁、参照。
- (262) Cf. Biddle, ed., *op. cit.*, pp. 18, 353, 357.
- (263) Cf. Biddle, ed., *ibid.*, p. 369: Table 21; Figure 16 a. * ロムシイ尼僧院長の所有する屋敷地数は、右の表には一一とあるが、その *Gere* 通りに在る屋敷地 ([1086]) は、事実上三つの土地 (iii terras) より成っているゆえ、一一を一三と改む。
- (264) Cf. *Ibid.*, p. 369: Table 22; Figure 16 b.
- (265) *Ibid.*, pp. 370, 441.
- (266) *Ibid.*, p. 371: Table 23.
- (267) *Ibid.*, p. 370.
- (268) 本誌第三十五卷第四号、二九三—二九九頁、参照。なお此處で通貨の「圧造」と言つて通貨の「鑄造」と言わない理由については、本誌第三十四卷第四号、一〇二頁註(56)ならびに九七頁の記述を参照せられたい。
- (269) この條項、又次の[118]、最後の[129]に現われる表現、「そのバロン[の土地]につきて」の意味に関しては、Biddle, ed., *op. cit.*, pp. 19-25 に、ハッロウ教授に依る、とくに夫れのいま *de terra baronum*《なる表現との相違に関する、精緻を極めた解説がある。就いて見られたい。
- (270) Biddle, ed., *ibid.*, pp. 415 & note 7; 419 (note 8); Addenda (on p. 556).

前 々 号 拙 稿 訂 正

- 一一九頁 一四行目 アンデチュウ伯……と再婚(二二八)→アンデチュウ伯……と再婚(二二八)
- 一六行目 プロア伯エティエンヌ→ブルワ伯……